
Red Nocturne

Sir.Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e d N o c t u r n e

【Nコード】

N 4 7 3 5 K

【作者名】

S i r . F e

【あらすじ】

復讐のため人の身に余る力を手にした少年と、正義のためただ前へ進む少女の邂逅は、世界をどう変えるのか？

Section 1 (前書き)

初投稿です。駄文ですが、読んでいただけたらうれしいです。

Section 1

「私が現場に向かうと、そこにあっただのは 悪魔 の斬殺死体と、おそらく夫婦と思われる二人分の骸だった。生存者を見つけるのは難しいと思われた。」

「??? お父さん？」

「??? お母さん？」

燃え盛る炎の中に、幼い声が聞こえた。

『ううああ。アアー』

その余韻が消えないうちに、慟哭の叫びが、いや咆哮と言ったほうが適切だったかもしれない。それは獣のそれのように、私の体を竦ませた。

少年と思しき影がこちらを向いた。

私はその少年に恐怖した。まだ十歳にも届いていないであろう子供に、だ。

いや、あれは少年の形をした、別のなにかだったのかもしれない。今でも覚えているよ。あの深紅の瞳を。血の赤より不気味で、炎の赤より恐ろしい、あの瞳を。

「??? あれは悪魔の目だった」

「??? ルーザン村襲撃事件派遣部隊員の証言より」

「学校って一度卒業したら、二度は入らないものだと思っていたんですけど？」

軍服を着た青年は、おどけた口調で尋ねた。

「任務だ。仕方あるまい。もう一度ハイスクールからやり直してこい。しかし、今回の目的は忘れるなよ」

「わかってますよ、大佐」

「本当かしら？ ウイル君は女の子に弱いから」

いつからいたのか、背後に青年と同じ軍服を着た金髪の美女が立っていた。

「ひどいですよ中尉。任務より優先するほどじゃありませんって。第一、年下に興味は「そう。せつかく可愛い娘がいるっていう情報を持ってきてあげたのに」」

「またそんなことに能力を・・・」

「いらないの？」

笑顔で訊いてくる中尉。男のプライドが即答を許さなかったが、答えは同じだった。

「・・・ほしいです」

「素直でよろしい。でも、行けばすぐにわかるわよ」

「えー。それ教えてくれてないじゃないですか」

落胆する青年。

「二人とも、なぜ 片翼の鷹 ベア・イーグル にこの件がまわされたか分かっていないようだな」

それを見てやや声を荒げる大佐。

「まあいい。少尉、お前の任務は？」

「学舎へ潜入、シャスルーク付近で確認された 悪魔 の調査、及び生徒の安全確保です」

「中尉」

「情報収集と少尉のサポートです」

「よろしい。だが、今回の任務で潜入する学舎は、どうも 夜の舞 ナイト タインの在籍する所らしい。これは確かな筋からの情報だ。緊急の場合、姫に協力を求めてもよい。

必要なものは部屋に運んである。あとはお前たち次第だ。健闘を祈る。行つてこい」

「了解」

二人の声がきれいに重なった。

「ルーク！ おい、ルーク！」

自分と呼ぶ声で、自分が少しの間眠っていたことに気付いた。
「今日転入生が来るんだってよ」

隣と同級生が目を輝かせて話しかけてきた。

「それも二人。そしてなんと！ 二人ともこのクラスらしいぜ」

「へえ、それは楽しみだね。フレッド」

「だろ？ でもよ、この時期に転入ったのもおかしい話だよな。新学期始まって二ヶ月ちよいだぜ」

確かに、言われてみればおかしい気もする。しかし寝起きだったということもあって、深くは考えなかった。

「ああ、美少女だったらいいなあ」

まったくこの女好きときたら。

「さすがに、そこまではわからなかったんだ？」

「おう。顔写真どころか、性別すら調べられなかった」

「それは残念。でも期待はしたいね」

「そうだろう。ああ美少女よ来い！」

ルークはいまにも美少女を召喚しそうな友人を無視して、ねむたそうな目で前を見ていた。

「はあ、テスト頑張らなきゃなあ」

小さいつぶやきに、フレッドは気付いた。

（少しくらい勉強以外のことを考えりゃいいのに）

しかしそれは、この優等生にはあり得ないことだった。

ここシャスルーク特別神籙学舎は、二百年程前に突如現れた悪魔に対抗できる、戦闘のエキスパートを育成する専門学校だ。だから、戦闘技術講習も半端なく厳しいし、レベルも高い。そんなエリートの中の上位五名に常に入っているのがこいつ。それに、頭だけじゃなく顔もかなりいいから、女子たちの取り巻きも多い。けど、かなり性格いいから男の人気も高いし、教師たちの信頼も厚い。しかも神籙の才能までとび抜けている。

神籙というのは、この世界を構成する五大元素 火 水 風

土 光 を司る精霊の力を借り、言葉にその力を乗せ操る術のことで、全ての人間に一元素を操る力がある。逆に言えば、素養がある元素以外は操れないのである。これらは、その難易度によって八段階に分けられている。砂 など、マイナーな元素もあるが、基本はこの五つの元素である。

また、各元素の精霊を召喚することもできる。さらに、それらの精霊と契約すると、様々な恩恵が与えられる。契約なしでもそれなりに神籙は使えるが、契約していればその精霊が出来ることは無詠唱で操者も出来る。

でも、それは俺たちのようなガキにはまだまだ先の話だ。一年生だったら、第六神籙 が使えれば十分優秀といえる。だけど、何事にも例外というものはある。ルークはなぜか 風 の神籙を無詠唱、無因子で扱うことが出来る。しかも 第三神籙 まで。その理由を本人は知っているみたいだけど、俺を含め、自分以外の人にその話をするのではない。少なくとも俺は、ルークを親友だと思ってる。だから本音を言えば、俺にだけは話してほしい。

「おい。フレッド？ なに独りでぶつぶつ言ってるの？」

「ん？ いや、なんでも。それよりそろそろだぜ、転入生」

フレッドに促され、時計を見ると確かにそろそろ先生が来る頃だ。ガラガラという音を立てて扉が開く。

「噂をすればってか」

担任のセンブリッジ先生が入ってくるのを見て、フレッドが小さく言った。

「聞け。知ってる奴もいるかもしれないが、新しい仲間を紹介する。」

男子諸君、残念ながら二人とも男だ。じゃあ入ってくれ」

その言葉に続いて、開いたままだったドアから二人の転入生が姿を現した。

「きゃー、かつこいい」

それを皮切りに、クラス的女子が騒ぎ始める。このときのフレッドの顔は、なかなか見物だった。

「それじゃあ自己紹介から。まずそっちの大きい方」

「それ、俺のことっすか」

と落胆の表情を見せつつ、

「まあいいですけど。えーと、ウィリアムⅡルタベストです。専攻は・・・水です。よろしく」

きれいな金髪の青年だった。フレッドのように「取っ付きやすそうだな」などという失礼な感想は抱かなかったけど、専攻元素を言ったときの間が少し気になった。

「よし、次」

と先生が言つて、もう一人の方を見た。

見て、おや？と思う。その流れるような漆黒の髪が、男という性別に似つかわしくないはずなのに、それがとても自然な感じだった。

ふいに彼がこつちを向く。目が合うと、その瑠璃色の瞳から目を逸らせなかった。それに、顔もとてもきれいだし、男の顔という感じがしない。纏っている空気が、男だとは思えなかった。

しかし、それは女の子らしい柔らかく包み込むような感じではなく、ナイフの刃のような鋭く研ぎ澄まされたものだった。

それでも、僕やもうひとりの転入生とは違って、「本当は女です」みたいな答えが返ってきてても驚かない自信があった。

「ロゼⅡフレイル」

黒髪の転入生は短く答えた。「・・・それだけか！」とまたもや感想を述べるキレ気味の友人。美少女じゃなくて残念だとは思いつけど、八つ当たりはやめなよと思う。

「補足すると、こいつはお前らより一つ年下だ。まあ、仲良くやってくれ」

（つまり飛び級？それってかなりすごい）

しかし隣では

「ああ。だからあんなにちっこいのか。うん、納得」

確かにその転入生は平均より、若干、小さいと言える。しかし、

そのことを大柄なフレッドに言われたら、たぶん、いやきつと不快になるだろう。だから、面と向かって言わないでよ、と心の中で願う。

「よし、質問ある奴いるか？」

「はい！」

フレッドがここぞとばかりに、元気よく手を挙げる。

「ん？ フレデリック言ってみろ」

「彼の専攻元素はなんですか！」

二人とも彼なのだがその対象は明らかだった。

「フレッド、八つ当たりはやめなつて」

さすがに、注意する。でも、確かにそれくらいは知りたいなと思う自分がいた。

「却下」

「???え？」

「な、なんで？ 先生」

「なんでもだ」

まさか先生が答えさせないとは思わず、しばらく啞然。

「先生」

「何だ？ フレデリック」

「横暴です」

「だまれ」

「いやです」

「単位を落としてもいいのか？」

「うっ」

先生の言葉に屈しそうになるフレッド。

でも、先生それはさすがに横暴です。

「シエイド」

言い合う二人の間に別の声が割って入った。一瞬、その名前が指す人物が分からなかった。

「何だ？ フレイル」

ああ、先生の名前か。知り合いなのかな？と新たな疑問が浮かぶ。
「別に答えてもいいだろ？」

「言いすぎるなよ」

「わかつている」

転入生はフレッドに向き直り、見つめる。フレッドはその意味に
気付いたのか、

「フレデリックダグフォード」

と挑むように名乗った。

「ダグフォード、私は元素が操れない」

「????え？」

予期せぬ答えをフレッド含めクラス全員が、しばらく理解できな
かった。しかし、いち早く立ち直ったフレッドは

「なんで神籙を使えない奴が飛び級できるんですか！」

と先生にかみつく。その答えを言おうと口を開く転入生。

「それは私が??？」

「待てフレイル！ それ以上はだめだ」

先生の制止に渋々といった様子で彼は口をつぐむ。

「なんなんですか！ その明らかな特別扱いは」

「お前には関係ないことだ」

いつもは見せない先生の迫力に圧されて引き下がるかに見えたが、
フレッドは矛先を変え、とんでもないことを言いだした。

「おいチビ！」

「それは、私のことか？」

聞き返す声に、怒気が混じっているのを感じる。

「そつだ。先生の陰に隠れやがって。男なら男らしく、俺と勝負し
ろ！」

そう言われた彼は、センブリッジ先生を尋ねるように見た。その
顔が「やらせろ」と言っているように見えたのは気のせいだろうか。
「フレッド、やめなつて」

と小声で窘めてみたが、前言を撤回する気はないようだ。

だいたい、勝負って……。僕でも見上げるような体格のフレッドが、その転入生に喧嘩を売っている図は、もはや、女の子をいじめているようにしか見えない。

「まあ、フレイルの実力を見てもらういい機会だ。いいだろう、その勝負許可する。日取りはこっちで決める。フレデリックとフレイルには追って知らせよう。それでいいか？ フレデリック」

えっ先生許可しちゃうんですか、とか驚いているうちに、

「はい」

とフレッドは、満足そうな顔で答える。

「それじゃあこの件は終わりな。よし、ルーカス」

「はい」

「二人のことよろしくな」

「わかりました」

「級長も大変だな。あんな奴らを案内しなきゃいけないんだから」
などという、無責任かつ失礼極まりない友人の発言を聞き流し、転入生に声をかける。

「ルーカス」セネフォンです。このクラスの級長をやっています。
わからないことは気兼ねなく僕に訊いてください」

「よろしくな。ルーカス」

「ルークでいいですよ」

「んじゃ、俺のことは、ウィルって呼んでくれ」

「わかりました。ロゼさんもよろしく」

「ああ。それと、私の方が年下だ。さんはなしにしてください」

「あ、はい。わかりました」

「そうだぞ。そんなチビに、さん付けなんてしなくていいぞ」

というささやきを再び無視して、

「それじゃ、放課後に学舎の案内をするので、帰らず待っていてください」

「りょーかい」

「わかった」

と二人への連絡を終えたところで、一時限目の開始を告げる鐘が鳴った。

Section 2

放課後、約束通り学舎の敷地内を二人を連れてまわった。

「二人ともすごいね」

今日一日を振り返って思ったことを口に出す。なぜかついてきたフレッドは、それが面白くなかったようで

「美男子め。男の敵め」

などと呪詛を唱えるかのごとく呻いていた。

まあそれは置いといて

「ウィルはどこかで訓練してたの？」

それは戦闘訓練のときだった。今日は、空中に浮かせたボールを神籬銃で狙って撃つというものだったのだが、一年の最高記録で二十秒前半という難易度にもかかわらず、ウィルは十秒かけずにすべて当て終えたのだ。

「まあ、やってはいたけどね。詳しいことは秘密」

「ふーん。まあいいや。ロゼは？」

「なんの話だ？」

「あの解答。先生でもあそこまで把握してないと思うよ」

そうロゼはロゼで、神籬の授業の時間に「五大元素の主な精霊の名前を答えよ」という問いで、そのすべてを正確に答え、さらにその特徴まで事細かに付け足したのである。それに先生を含めクラス全員が驚いた。さすがのフレッドも、このときは口を開けたまま固まっていた。

「それほど難しいこともない。一度実物を見ればいい」

「それが出来れば苦労しないよ」

とは言わず、苦笑するにとどめる。

「まるで、自分は見たことがあるかのように言っな？」

しかし、ウィルが鋭く指摘する。

「秘密だ」

「そうきたか」

「お互い様というやつだ。お前も、隠し事があるだろう?」

「そうかもしれないな」

二人の攻防(?)が一段落したところを見計らって、声をかける。
「じゃあ、また明日。とりあえず、今日でだいたいの施設は案内したから、困ることはないと思うよ」

「ありがとな」

「助かった」

二人が寮の自室へ帰るのを見届け、自分も部屋に戻る。

「フレッド、僕たちも帰るよ」

ロゼを睨み続ける友人を促し、二人で共用の自室に向かう。

「しかし、むかつくな」

「なにが?」

「部屋割りだよ。二人とも相部屋じゃないんだぜ。絶対なにかある!」

「そうかもしれないけど」

「だろ? そう思うよな。よし、決闘で勝って必ず聞き出してやる」

「あまり無理しないでよ」

「待つてろよ。勝って、正体を暴いてやる」

聞いてないし、こいつ。

でも、なんだかんだいってフレッドも、詠唱使えば第四神籙まで扱えるし、一年ではかなり優秀なんだよね。だから、ロゼが怪我させられないか心配だな。ロゼは頭脳派って感じで実技は得意そうじゃないし、神籙が使えないらしいし、フレッドも今回異様に張り切ってるし。

「はあ」

「どした? やっぱ、チビたちの案内が疲れたんだな。うんうん、級長は大変だな」

級長がというより、フレッドの友達が、だよ。

「それよりも、相手は年下なんだから、ムキにならないで話し合い

で決着つけなよ」

「いいや。だからこそ、なぜ飛び級が出来たのかを、勝って聞きだす」

そう言ったフレッドの茶色の瞳は、爛々と輝いていた。

「はあ」

これだけは言える。これから、ため息と長い付き合いになる、と。

次の日の朝、センブリッジ先生から二人の決闘の告知があった。急なことに、今日の放課後に行うらしい。

決闘といっても、学生決闘だからそれほど危険なことはいはずなんだけど・・・心配だな。

しかし、そんな僕の心配をよそに、フレッドはいつも以上に元気で、授業も寝ないでまじめに受けていた。フレッドには悪いけど、かなり珍しい。

ロゼも「怪我をさせないように気を付けるから安心しろ」だって僕が気にしてるのは君なんだけど、というよりその自信は一体どこから来るの？

しかし、時間は無情にも過ぎてしまい、放課後になってしまった。「おいおい、チビ。そんな刀を持って何するつもりだよ」

フレッド、悪役が堂に入ってきてるよ。

でも、確かにロゼは刀を二本持っているだけで、因子などは持っていないように見えない。

「私の武器はこれだ」

「冗談もほどほどにな。じゃないと怪我するぜ」

「いや、本気だ」

フレッドは、淡々と答えるロゼを睨みつける。

「なめるのもいい加減にしろよ」

「なめてなどいない。これが私の戦う術だ」

「それがなめてるっていうんだよ」

「そのへんでやめとけ。後はお互い、自分の技で語れ」と先生が仲裁に入る。

「準備はできてるな。よし、じゃあ会場に行くぞ」

戦闘技術講習の演習場には、かなりの生徒が来ていた。

先生にそのつもりはなかったみたいだけど、学長がやるなら派手に、と学舎中にこの話を広めてしまったらしい。

誰かが二人に気付いたようで、ワァーと会場が沸く。

どこ、ここ？と思わず洩らしてしまうほどに、普段の学舎とはかけ離れた世界がそこにはあった。

「悪い、学長が好きでな」

「これで、チビの逃げ道はなくなった」

「私は逃げるつもりなどないぞ」

「フレッドのはノリみたいなものだから、いちいち答えなくてもいいんだよ」

「そうなのか」

「おい、始めるぞ。二人とも中央へ」

ああ、やっぱりやるんだ。

「心配すんなって、ちゃんと勝ってくるから」

だから、心配してるのはそこじゃない。

「ロゼ、やっぱりやるの？」

「ああ」

「怪我しないようにね」

「ダグフォードを侮っているわけではないが、負けるつもりはない。負けては私の立つ瀬がないしな」

すごい自信。でも、

「神籟なしでどうやって勝つの？」

「それは????」

「早くしろ」

「わかった」

先生を先頭に、二人が入場する。

先生のせいで聞きそびれた。でも、見れば分かるはず。神籙操者相手に、神籙なしで戦う方法。

「ルーク」

どうやって、戦うんだろう。あの刀に秘密があるのかな。

「おい。ルーク？」

「あつ、ごめん」

「いや、別にいいけどさ。そんなに決闘いやか？」

「あ、うん。人が怪我したりするのを見るの、あまり好きじゃないし」

「そうじゃなくて、自分がするのは？」

「えっ」

「お前、かなり優秀らしいからさ。確か、無詠唱で 第三神籙 まで使えるんだろ」

「この力は、やっぱり悪魔と戦うためのものだから、こういうことにはあまり使いたくないんだ」

少し語気が荒くなってしまった、と後悔する。

「だったらさ、このあと俺とやらない？ 俺こつというの好きでさ」

しかし、ウィルはそんな話などなかったかのように、さらっと切り出した。

それが決闘の申し込みだと分かるまで、数秒かった。

「な、なんで、そうなるの！ というか、断ったよね。少し遠回しだったけど」

「いやゝ。なんかさ、血が騒ぐっていうか」

「僕とじゃなくてもいいよね、それ」

「でも、せつかくだから」

なにが、せつかくなのかまったく分からない。

「じゃ、俺先生に言ってくるから」

そういつて、先生が待機している放送室へと走り去る。

なんで、どうして、そういう話になるの？
「絶対やらないぞ」
ルークはそう心に誓った。

Section 3

この勝負、絶対に勝つ！

ロゼは怒っていた。身長は自分が最も気にしていることだからである。それ以前に、ここに編入すること自体快く思っていなかった。そもそも父上があんなことを言いだすから、こんなことになる。シェイドの奴も止めてくれれば良かったのに、あるうことか「それはおもしろそうだな」などと言って協力してしまったし。

「ロゼ」

シェイドが小声で話しかけてくる。

「お前が強いということが分かる程度の力で戦えばいい」

「そう言われても、私は手加減など出来ないぞ」

する気もないしな、とは言わなかったが、まだ、「チビ」発言を許したわけではない。

「それは、十分わかってる。攻撃を避けて、反撃の一撃だけでフレデリックの戦意を奪え」

「善処する」

「それから、アレは禁止な」

「六回目だぞ。そんなに言わなくても、分っている」

「それならいい」

そう言って、シェイドはダグフォードと私の間に戻り、手をあげる。

「これより、フレデリックⅡダグフォードとロゼⅡフレイルの決闘を始める」

ワァーと再び会場が盛り上がる。

「両者、礼！」

号令に合わせ礼をする。

相手に背を向け、開始の位置へ向かう。

二日ほど、腰に差していなかったただけのはずなのだが、刀の重さ

がとても心地いい。

ダグフォードが、詠唱を始める。

「????その身に纏うは

????儚い力の残滓

????友を守る壁となり

????敵を貫く槍となる

????我の求めし彼の光

????いま我が前に現れたまえ

????ウィル・オ・ウィスラ光塵妖精　　????」

詠唱が終わると同時に、ダグフォードの目の前に、両手を広げたより少し大きめの召喚門^{ゲート}が現れ、白く光るそれから、拳大の光の玉が四つ飛び出した。光塵妖精は、白とも黄ともとれる淡い光を放ちダグフォードの周りを飛び回る。

「始め!」

召喚を確認したところで、シェイドが開始を告げた。

ゆっくりと両腰の愛刀の柄へ手を添え、いつもと同じ、抜刀の構えをとった。

勝負は、フレッドが優勢のように見える。少なくとも観衆のほとんどの人と、当事者以外の目にはそう映ったと思う。

だけど、フレッドの召喚した光塵妖精の攻撃を、ロゼは苦もなく躲している。しかも、まだ刀を抜いていない。光塵妖精は光の中級精霊で、召喚には第四神籟相当の技量が必要になる。そこから考えても、フレッドが本気なのは分るし、攻撃の鋭さもそれなりにある。一年生にしては、というより学舎内でもそれなりの使い手とっていいと思う。それでも、ロゼには掠りもしない。

急にフレッドが攻撃を止めた。

「おまえ、何者だよ」

当然といえば当然の疑問だった。

「ロゼ」フレイルだ、と名乗ったと思うが？」

「とばけんな。そんだけ戦えて、なんで学生なんだよ」

僕もそう思う。

しかし、ロゼは答えない。

「まあいい。これに勝つたらっていう約束だからな。勝つたらもう一度訊く」

とフレッドは宣言するように言った。

フレッドが、掌へ力を集めているのがここにいてもわかる。

「光を統べる数多の精霊よ、その力、我に貸し与えたまえ」

その詠唱は精霊を呼ぶための 讃頌^{なんじょう}ではなく、神籙^{しんげん}を扱ったための 箴言^{しんげん} だった。いまさら通常神籙でどうにかなるとは、フレッドも思っていないだろう。だからこそ、その行動は不思議だった。

「一瞬で決まる」

そう言ったフレッドの手には、圧縮された雷が眩しいほどの光を放っている。

「????その光を以て

????暗雲を貫き

????我が途を創れ

????雷の矢

そしてその手をロゼに向け、稲妻を放つ。それは人間の目ではとても捉えきれない速さでロゼの身体を貫いた。

まさに一瞬だった。フレッドの自信は裏付けのないものではなく、今の技は抑えているとはいえその速さも威力も十分のものだった。

「ロゼ！」

思わず叫んだ。目が光にやられてしまい、会場の様子がわからない。

「うそ、だろ」

フレッドの震えた声が聞こえた。

目がやっとロゼの姿を映した。

ロゼは立っていた。一度も抜かなかった刀を構えて。

「その攻撃、威力はあるが、発現場所が手に限定されていることで見切られやすい。手数や、効果範囲を大きくするか、発現の限定を無くすかしないと、命中させるのは難しいと思うぞ」

それは助言だった。

フレッドはもう一度、術を放とうとする。

「それから」

と言ったロゼは、すでにフレッドの背後に移動していた。それは消えて現れたとしか言いようのない移動速度だった。

「発動までの時間が長い」

手に持った刀をフレッドの首筋に当て、そう言った。

「勝者、ロゼ」フレイル」

先生の声が会場に響く。それに呼応するように観戦していた生徒たちの声が会場を震わせる。

「フレデリック、まだこいつの実力に不満があるか？」

「いえ・・・ない、です」

未だに何が起こったのかわからない。目の前にいたはずなのに、いつの間にか後ろを取られていた。

「ならいい。この後、ルーカスとルタペストが試合をするらしいから、早く着替えてこい」

「えっ、ちよつと、ちよつと待ってください。ルークが戦うって言ったんですか？」

「いや、ルタペストがそう連絡してきた。俺としてはいい機会だから、異存はないんだが・・・。何か言いたそうだな」

「だってあいつは？」

「言わんでもわかってる。しかし、ルタペストがそう言ってきた」「死にたいんですか、あいつは」

「そんなことはないと思うぞ。」

ほら、着替えてこい。お前も見ろだろ」

渋々頷き、控え室へ走っていく。

「ルーカスが本気になれば、お前とも互角に戦えるんだけどな」

シェイドは、更衣室へ向かうダグフォードに聞こえない程度の声でロゼに話しかける。

「あれが、か？」

「そうだ。本気のお前とでもな」

それが冗談として言ったのではないことに驚く。

「まあ、色々あつて本気を出さないんだがな」

「戦えなければ、足手まといになるだけだ」

「その通りだが、俺は期待しているんだ」

柄にもなく真剣な目をしていた。少し意外だったこともあつて、言葉が出てこなかった。

「そろそろだ。お前も着替えてこい」

と話を切られたため

「わかった」

そう答えて、更衣室へ向かう。

（それほどの能力を、あいつが持っているのだろうか？）

？？？ルーカス・セネフォン。どう見ても一般人の域を出ていない生徒に見えた。確かに学舎（こく）では優秀かもしれない。だが悪魔との戦闘で、そんな温いものはなんの役にも立たない。

そんなことを考えているうちに、更衣室に着いた。ここは普段、倉庫として使われている場所なので、誰かが来ることもない。ロゼは特に警戒もせず、着替えはじめた。

Section 4

その頃、ルークは半ば強制的に試合をさせられることになった自分の不運を呪っていた。異論、反論はことごとく無視され、というより学長一人の意向によって強引に却下された。

その後、当然のごとく戦闘服など用意していないルークは、それを頼みの綱に反撃を試みたが、

「戦闘服は物置に行けばあるから大丈夫。」

と最後の希望も、学長の一言で砕かれたのだった。

そして今、その指示された倉庫に向かっている。

深いため息をはきながら、無意識に左腕につけている四つの腕輪を玩ぶ。それが、特殊な素材から作られていることが、その音から正確には音がしないことによってわかる。そのうえ、金属のような外見からは、想像できないほどに軽い。これは、ルークの唯一装飾品と呼べるものだった。普段からそういうものを欲しいと思ったこともない。だからこれも当然、装飾としての役割がその本質ではなかった。それはルークにとって過去であり、枷であり、自身の存在を許すものだった。負の感情を与えるはずの腕輪だったが、昔からこれに触るとなぜか落ち着いた。

突然の試合でざわついていた心が、静まっていくのが分かる。それと同時に、いつのまにか倉庫の前まで来ていたことに気付く。そして、風が先客の存在を知らせる。

ここに用がある人間は、自分一人のはずだ。

級長という役職上、悪さをする生徒を注意することも度々ある。そして、言葉で駄目なら実力をもって。だから、級長はその学年の実技優秀者になることが多い。経験から、その仕事をしなければならなくなる気がしたため、中の人間に気付かれないように気配を消して部屋へ入る。

まず目に入ったのは、床に散らかっている戦闘服だった。続いて、

棚の向こう側で動く人影を捉え、慎重に近づく。

「誰だ！　って、ロゼ？」

そこにいたのは間違いなくロゼだった。しかし、なにかおかしい。その違和感は、ロゼが着替えの途中だったことに起因する。

これから着ようとしていたのか、ロゼは片手にシャツを持っていた。下着以外に何も身に付けていなかった。だから、その透けるような白い肌と、胸のあたりにある小さな膨らみが、否応なく視界に入ってきた。

「ロゼ、君つてもしかして???」

とてつもない殺気に、言葉を切る。そして、ロゼは立て掛けてあった刀に手を伸ばしている。

「いや・・・あの・・・学長がここを使えって。そ、それに知らなかったんだ。君がおん???」

「さっさと出ていけ！」

そう言つて刀をロゼが抜く前に、慌ててルークは外へ逃げた。追撃はなかったが、衝撃の事実には頭がまだ混乱している。

少し待つと、さっきより幾分か落ち着いた気配が扉に近づいてくるのが分かった。

「その、取り乱してしまつてすまなかった」

倉庫から出てきたロゼはそう言った。

「僕の方こそ、ごめん」

訊きたいことはあるけど、こっちから訊くのはちよつとな、と思ひ質問は控える。しかし、ロゼの方から説明を始めてくれた。

「私は事情があつて学校に行つたことがなかったのだが、父上の提案でここに入学することになったのだ。そこまでは良かったのだが、私が制服のことで「動きやすい男子用の制服がいい」と洩らしたら、父上が「だったら男として過ごしたらどうだ」と言つて、いつの間にか私が学舎で女だとはれたら、ドレスで生活するという罰まで設定されていて・・・逃げられず今に至っている」

ロゼは一気にそこまで言い切ると、はあ、とため息をついた。

「お前にもうばれてしまったがな」

しかし、ルークには一っただけ疑問があった。

「ドレスが罰なの？」

そう尋ねると、少し顔を赤くして

「あれは、人間の着るものではない。露出が多い上に、下のひらひらしているところから風が入ってきて寒いし、あんな恰好ではまともに戦えん。よくあんなものが着れる」

感情を表に出さないと思っていたロゼが、分かりやすくて子供っぽい性格をしていることが意外で、つい笑ってしまった。

「なにが可笑しい」

少し不機嫌な声だ。

「うつん、なんでもない。でも、僕はロゼのドレス姿を見たいな。きつと似合うと思うよ」

ルークは素直に自分の気持ちを言っただけなのだが、ロゼの顔はどんどん険しくなり、体が小刻みに震え始めた。

「それは、私に対する宣戦布告と受け取ってもいいのだな？」

ゆっくりと、しかし有無を言わせない強い声でそう言った。

「そうだな、知られたからには口を封じねばなるまい」

「え？」

「ルタペストに言ってこよう。私が代わってやると」

確かな足取りで、ウィルがいる控え室へと歩いていく。

ルークはそれを呆然と見送り、上を向く。そして、自分の更なる不幸を嘆くのであった。

Section 5

会場に着くと、さっきの試合に魅せられた生徒たちがロゼの名前を叫んでいた。試合の組み合わせの変更は、もう伝わっているようだ。

「ルークス」

声のする方へ振り向くと、センブリッジ先生が立っていた。

「どうしたんだ。何かあいつの恨みを買うようなことでもしたのか？」

しかし、ルーク自身なんてこうなってしまったのかわからない。

「僕もよくわからないので、なんとも」

「???そうか。まあ、それは別にいいんだが。」

わかっていると思うが、あいつに手加減は必要ない」

そう言って、一振りの剣を僕の前に出す。

「剣？」

「学長からだ。『君の剣は特殊だから、普通の剣は使いづらいと思うけど我慢してね』だそうだ。俺はパシリか、まったく」

なるほど、と納得してしまう。

「わざわざありがとうございます」

礼を述べて、受け取ろうとしたが、先生は剣から手を放さない。

「もう、自分を許してもいいんじゃないか。過去じゃなく、現在の自分と向き合ってみろ。その力、何のために使う？」

ハッとして、剣から目を上げ、先生の顔を見る。

答えることが出来ない。先生の言っていることは正しいと思う。でも、まだ答えを出すために、あの時のことを切り捨てる勇氣はない。

先生の焦げ茶色の瞳を正視できず、目を逸らしてしまう。

何も言わず、何も言えず、剣を奪って、定位置へ逃げるようにして向かった。

先生の独り言が聞こえた。

「逃げられない時はどうするんだ」

それは、そのとき考えるしかない。しかし、そのとき何が出来るのか、というよりも、何か行動を起こせるのかもわからない。

この答えは、そう簡単に見つかりそうもない。

ふと顔を上げると、目の前にロゼが立っていた。さっき別れたときのままの目で僕を見ている。

しかし、殺気というほどの力は込められていない。これから始まるのはあくまで試合であって、実戦ではないと分かる。

それだけで、わずかに心が軽くなる。

「締まりのない顔だと、言われたことはないか？」

ロゼの言葉に反応して、つい顔を触ってしまう。

「ダグフォードのときのように、手加減はしないぞ。その顔を引き締めてやるから覚悟しろ」

性格変わってません？

「これより、本日二回目の決闘を開始します」

突然、放送が入る。

「が、学長？」

「なお、負けた方には私からのプレゼントがあります。お楽しみに」

ああ、間違いなく学長だ。

放送席に目を向けると、学長がひらひら手を振っているのが見える。

「ルーカス」セネフォン君と、ロゼ「フレイル君は定位置へ」

再び入った放送に従い、ロゼが背を向けたのを見て、ルークも定位置へ向かう。

「それでは、準備も整ったようなので、始め」

ロゼが、刀を抜く。さつきは気にならなかったけど、その刀身は夜の闇のように黒かった。恰も、全ての光を吸い込んでいるかのように、会場の照明を受けても輝きを見せない。

「いくぞ！」

その声と同時に、ロゼの姿が消える。背後に現れた気配に急いで振り返ると、ロゼはすでに攻撃を仕掛けていた。

（速い！）

胴を切り払う一撃を後方に跳ぶことで躲す。しかし、攻撃はそれで終わらない。左側の刀が突き出される。それを身を擦って避け、右から振り下ろされる刀は、もう一步下がることでなんとか躲す。

ロゼの神速の攻撃を、示し合わせたように紙一重で躲すルーク。それは、まるで演舞のようだった。会場の人間は固唾を吞んでそれを見守る。

だが、戦っている二人、特にルークは、あくまで試合だからという認識を改めざるをえず、必死の回避を続けていた。もちろん、とても踊っている気分を味わうことなどできない。

一方ロゼも、心中穏やかではなかった。

まるで、素振りをしている気分だ。学生程度相手にもならない、ドレスの件についてどう追求しようか、など試合の後のことばかりを考えていた。しかし、未だに自分の刀は相手に掠ることすらできていない。しかも、あるうことかこの男は、私に攻撃しようとはしないのだ。なめられてるとしか思えない。怒りが沸々と沸いてくる。しかし、現実を見ると、別のなにかが思考を支配する。それを認めたくないが、もう認めるしかない。そう、焦っているのだ。目の前の男が、自分の予想を裏切ったことに。

ところで、ルークも焦っていたのだが、ルークを焦らせているのは全く別のことだった。

この試合、負けるつもりだったんだけど……。目の前の少女の攻撃を受けて、その考えは捨てた。というか、殺される。

しかし、それよりも学長の意味深な「プレゼント」発言が気になって、簡単に負けられなくなってしまったのである。だからといって、いくら強くても女の子に対して、攻撃することには抵抗があった。

そもそも、なにが彼女を怒らせてしまったのか分からないのだ。謝ろうにも、なにを謝ればいいのか。自分の思うところを言っただけだし、その発言のなかに失礼なものはなかったと思う。

「なぜ攻撃してこない？」

ロゼが、いきなり間合いをとって尋ねてきた。

君が女の子だから、とか言ったら怒るよね。だから、黙っているしかない。

「攻撃しなければ、悪魔は倒せんのだぞ。お前もこの生徒なら、悪魔と戦うことを前提に????」

ロゼの声は、ルークには聞こえていなかった。風が敵の来訪を知らせたからだ。懐かしい気配は段々近づいてくる。

「おい！聞いているのか」
「来る」

ルークの声に続いて、警告音が会場に響き渡った。

「悪魔が現れました。演習場の生徒は、速やかに避難してください」
緊急放送が流れると、変わらずに響き渡る警告音の意味を理解したのか、会場はパニックに陥った。

「あ、悪魔だつて！」

「冗談じゃない」

「に、逃げる！」

あちこちから、悲鳴に近い叫びが發せられる。入口に生徒が殺到し、自分が助かろうと押し合う生徒が原因で、避難は一向に進まない。

「お前も逃げろ！」

ロゼは、セネフォンに向かって叫ぶ。

悪魔は学生が束になってかかったところで、相手にならない。

「早くしろ！」

しかし、天井の一点を見つめたまま微動だにしない。

「あ……く……ま……」

「そうだ。悪魔が来ている。だから、早く???」

そのとき、天井を突き破り黒い何かが演習場に飛び込んできた。

「くつ。もうここまで」

一般人を庇いながら 悪魔 の相手をするのは無謀だ。
だが、一体ならどうか??。

しかし、その予想を裏切り、さらに三体の 悪魔 が侵入してきた。

「四体だと！」

いくら私でも、人を庇いながら四体を相手にするのは無理だ。

「こんなにたくさん」

後ろから声がする。

「悪魔か」

ひどく冷めた声だった。

振り返るとしかし、セネフォンしかいなかった。

「空耳、か」

しかし、 悪魔 がいることを思い出し、我に返る。

Section 6

最初に侵入してきた 悪魔 はもうそこまで来ていた。機先を制するために、自分から間合いに飛び込む。悪魔 の爪を左の刀で受け流し、右の刀で首を斬り払った。

「一体目！」

しかし、次の一体は突然、ダグフォードのときとは比べ物にならないほどの閃光に包まれて消えた。

「シェイドか」

「遅くなった。外にも何体かいてな」

その返答を聞く前に、ロゼは三体目に向かっていった。一体目と同じタイプの 悪魔 だった。横薙ぎの一撃をかんで避け、そのまま背後に回り首を斬り落とした。

「三体目！」

そこで、失敗に気付いた。四体目は不利と見たのか、ロゼには向かわずセネフォンの方へ向かっていったのだ。

（まずい！）

ロゼもセネフォンの方に駆け出そうとする。が、後ろから肩を掴まれ、それは出来なかった。

「シェイド！何をしている。早くしなければ??？」

「落ち着け。お前に見せたかったものが見せれる」

「なに？」

シェイドに促され、セネフォンの方を見る。悪魔はもう攻撃態勢に入っていた。思わず、また駆け出そうとするが、シェイドに阻まれる。

「いいから、よく見ておけ」

悪魔 が爪を振り上げる。目を瞑るようなことはしなかったが、ハッと息をのむ。しかし、悪魔 の爪が振り下ろされることはなかった。腕を振り上げた格好のまま、悪魔 は霧散してしまった

のだ。

「なっ」

「わかったか？あれが、お前に見せたかったものだ」

人間業とは思えなかった。しかし、それがセネフォンの仕業だということとはわかった。いや、信じたくはないが、そうとしか思えなかった。

「ルーカス、大丈夫か」

シェイドが声をかける。

「はい。一体しか斬れなかったのが残念ですけど」

そう答えて、セネフォンがこちらを向いたとき、背筋が凍った。

恐怖したからだ。その深紅の輝きを放つ、禍々しい瞳に。狂気と良心が同居しているような、異質の存在を感じた。

「あれは、なんだ？」

「あれが、ルーカス」セネフォン、精霊の王と契約を結んだ盟友だディベンダー

「盟友、だと？一体どの元素の王だ？」

「風だ。風の王、アイテール」

「なぜ、そんな奴がここにいる？」

「さあな」

ロゼの疑問は尽きることがなかった。次の質問をしようとしたところに、話題の張本人でありながら、仲間はずれにされていたルーカが口を挟んだ。

「二人で何を話しているんですか？」

そのとき、ロゼは閃いた。いや、閃きというには些か物足りないものだったが。そう、本人に訊けばいいではないか、と。

「セネフォン！」

「は、はい」

「お前には訊きたい事が山ほどある。覚悟しておけ」

Section 6 (後書き)

とりあえず、一段落ついた。次の投稿はだいぶ先になると思うので、ここまで読んでくれた皆さんには申し訳ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4735k/>

Red Nocturne

2010年10月9日00時52分発行